

香芝市・平野窯跡群採集の須恵器

関 川 尚 功

目 次

I. はじめに	27
II. 平野窯跡群とその周辺	28
III. 採集須恵器	28
IV. 関連する須恵器窯	28
V. 平野窯跡群をめぐる地域と遺跡	28

論 文 要 旨

香芝市平野所在の平野窯跡群は、奈良盆地では最古の須恵器窯として知られている。その中の平野1号窯の採集須恵器はかつて『青陵』に報告されているが、採集須恵器のすべてではなかったため、あらためて全ての須恵器を図化し紹介した。さらに関連する須恵器として、平野2・3号窯と三郷町・辻ノ垣内3号窯の須恵器と比較した。その結果、平野2・3号窯は1号窯と同時期、辻ノ垣内3号窯はやや新しい時期とみられる。辻ノ垣内3号窯では7世紀初めの若草伽藍所用の瓦が同時に焼成されているというので、やや古い平野窯は6世紀末葉頃と推定した。平野窯は飛鳥時代の古墳群・寺院の分布範囲に含まれ、ここは敏達王家との関わりが考えられている。辻ノ垣内窯でも上宮王家による斑鳩寺の造営と関係がみられる。この時期の須恵器生産がこの地域に限られることは、この時期の王家にかかわる諸生産の一環であり、生産組織のつながりを示すものと思われる。

関川 尚 功（せきがわ ひさよし）

上牧町教育委員会 文化財専門員

奈良県立橿原考古学研究所 共同研究員

I. はじめに

平野窯跡群は奈良県香芝市平野に所在し、須恵器窯 4 基と瓦窯 1 基が知られている（図 1）。昭和 48（1973）年 7 月に耕作によって須恵器が出土したことにより、当研究所が踏査を行って須恵器が採集され、その結果は篁園勝男氏により『青陵』において報告されている¹⁾。

その後、当地では香芝白鳳台土地区画整理事業が進められることになり、昭和 49（1974）年に、当研究所により範囲確認調査が行われ、3 基の須恵器窯が存在することが明らかになった。昭和 58（1982）年に 1 号窯の調査が行われ、さらに須恵器窯である 4 号窯、その東に瓦窯の 5 号

窯が新たに確認され、合せて調査が行われている²⁾。

近年、上牧町・上牧久渡古墳群の調査において、第 4 号墳の出土須恵器が平野窯跡群で生産されていることが推定されている³⁾。このため平野窯跡群の再評価が必要となり、『青陵』に報告された当研究所附属博物館に保管されている須恵器を検討したところ、当時採集された須恵器が公表された以外にもかなりあるので、あらためて図化して報告し、今後の平野窯跡群の資料としたい（図 2）。

また平野窯の成立事情を理解するには、この地域の古墳・寺院を含めた遺跡との関係を明らかにすることが必要となる。そこで古墳時代末期から飛鳥時代の大和西部地域の様相について比較を行い、この地域において須恵器が生産さ

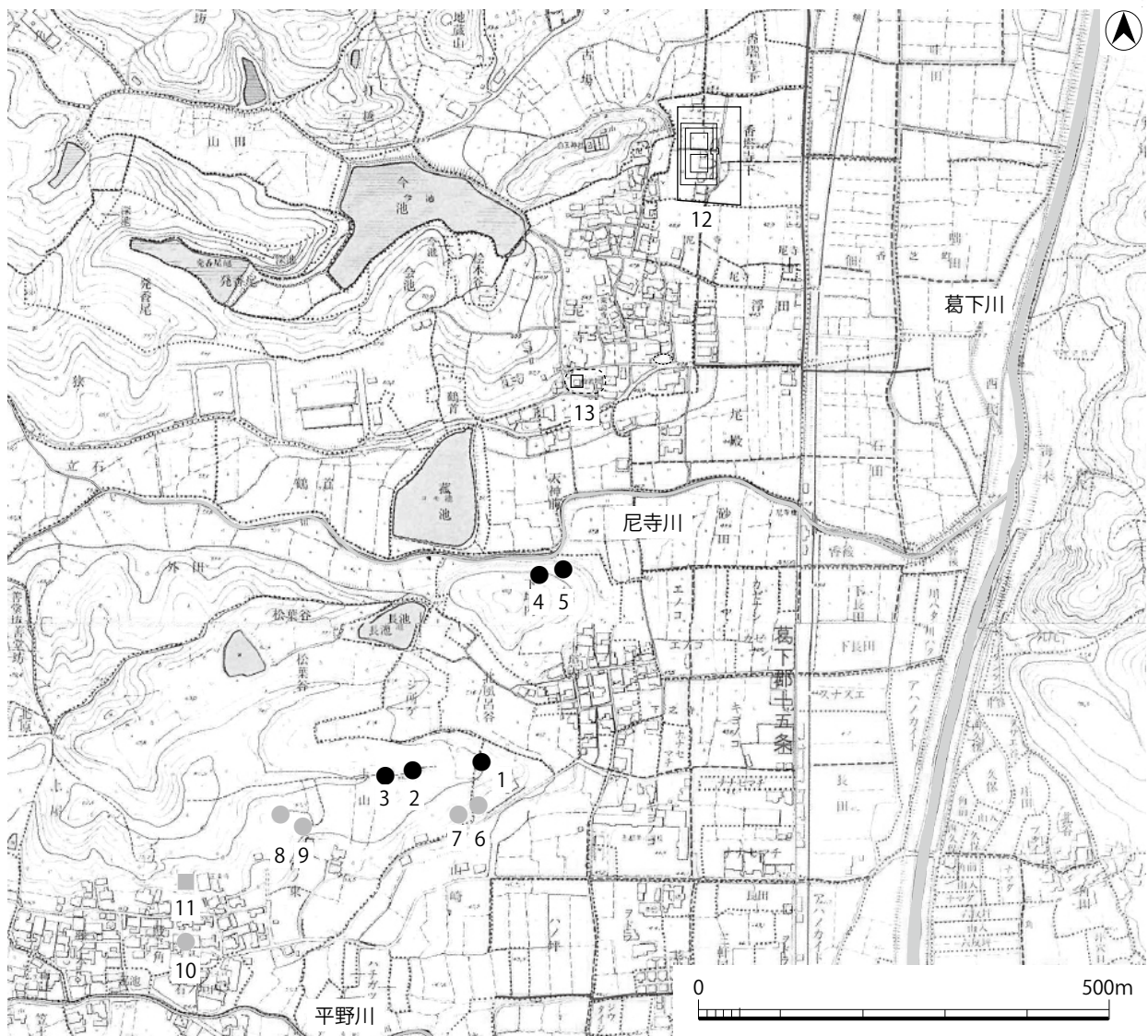


図 1 周辺の遺跡

1. 平野1号窯 2. 平野2号窯 3. 平野3号窯 4. 平野4号窯 5. 平野5号窯 6. 平野1号墳 7. 平野2号墳
8. 平野3号墳 9. 平野4号墳 10. 平野5号墳 11. 平野塚穴山古墳 12. 尼寺北廃寺 13. 尼寺廃寺南遺跡

れる意義についてふれてみたい。

II. 平野窯跡群とその周辺

平野窯跡群の内容 葛下川左岸の東方へ延びる南北二つの丘陵上に立地しており、北を尼寺川、南を平野川に挟まれるところである。このうち、南側の尾根は、平野古墳群が位置するところであるが、この北斜面に1号窯、その西方約100 m余りのところに並列して東に2号窯、西に3号窯が位置する。2・3号窯は未調査で、須恵器窯とされるが3号窯付近では瓦が採集されている。この2基の窯は香芝市指定文化財として白鳳台3号児童公園の中に現状保存されている。

調査された1号窯は、丘陵北斜面に築かれた窖窯で、上面は失われている。残存長8 mで、ほぼ水平の燃焼部より約25度の傾斜角度で焼成部が上がっている。これら平野1～3号窯から離れた平野古墳群北東の丘陵北斜面には、平野4・5号窯が並列して位置する。西側の4号窯は窖窯の須恵器窯で床面の一部が残る。5号窯は有段の窖窯の瓦窯である。多くの平瓦片と若干の丸瓦片が出土しているが軒瓦は明らかではない。

III. 採集須恵器

『青陵』において報告された採集須恵器は、その後、調査時において平野1号窯のものと確認されている。須恵器の器種は杯蓋(1～17)と杯身(18～27)を主体として、高杯(28)、台付壺(29～31)、甕(32～34)、鉢(35)がある(図2・表1)。杯蓋・杯身共に天井・底部にヘラケズリを加える。台付壺は肩部が丸く、凹線文間に斜めの刺突を加えるものである。その脚台は裾が段をもって立ち上がり、中ほどで二条の凹線で画し、1段の長方形透かしをもつ。甕は短い外反口縁部に端部に丸みをもつ外縁がつく。鉢は半球形の体部に端部が面をもってわずかに外反する。

これらの須恵器の時期については、口径の確実な19・22・25と次いで確かな23・24・26の杯身で比較すると、TK-209窯に相当するものが主体でTK-217窯の形態の杯も含まれるというところであるが、杯蓋の中にはつまみをもつものは含まれず、TK-209型式の須恵器とみられる。

IV. 関連する須恵器窯

平野2・3号窯の須恵器 これらは平野1号窯の西方に並列する須恵器窯で、未調査であるが、かつてここから採集された須恵器が知られているのでふれておきたい⁴⁾(図3)。

これらの器種には杯蓋(1～10)、杯身(11～21)、蓋(22～24)、有蓋高杯(25・28)、無蓋高杯(26・27・29)、短頸壺(30)、台付壺(31・32)、大甕(33)がある。杯身類は口径の確かな11・17～19・21をみると、1号窯とほぼ同じ口径である。ヘラケズリで調整されているのも同様である。21は底部のケズリがあまりなされなかったため通常とは異なる平底に近い底部形態となっている。無蓋高杯は2種、蓋は3種あり、大甕も存在する。

2・3号窯は1号窯とほぼ同時期といえる。杯を除く他の器種においてはやや違いがみられるようである。窯ごとに焼成器種に相違があるようである。

なお、これらの杯の中には還元焼成が不十分なため、通常の青灰色ではなく、赤褐色を呈したり、その色調が混じるものが含まれている(図3-1・4・12・13・16)。

三郷町・辻ノ垣内3号窯採集須恵器 これまでここで採集された須恵器が「ツクシ山」の出土地名で紹介されている⁵⁾(図4)。その後、1996年に当研究所により同地点の調査が行われ、窯の構造・規模が明らかになった。ここでは須恵器の他に瓦も出土し、瓦陶兼業の窯である。この瓦は若草伽藍出土瓦と同じ特徴を持つとされている。杯Hの蓋(1～5)と身(7～15)は天井・底部共にヘラケズリを残す。杯G蓋(6)が1点みられる。頂部が平坦な高めのつまみが付く。台付壺(16～18)は、18の体部は無文でカキ目のみである。脚部は16が二段透かしをもつ。これらはいずれも均質な硬い焼成で、平野窯にみるような焼成・色調の違いがなく、赤色・茶褐色のものはみられない。口径がたしかな杯身は9・10・12・13で、平野窯の杯身と比較すると、その口径が小さいものと同じであり、杯Gを含むことによりTK-217型式といえよう。

V. 平野窯跡群をめぐる地域と遺跡

辻ノ垣内窯と若草伽藍 平野窯採集須恵器の実年代を考える上で、辻ノ垣内3号窯の須恵器が参考となる。それはこの窯の調査において須恵器に伴って出土した「丸・平瓦

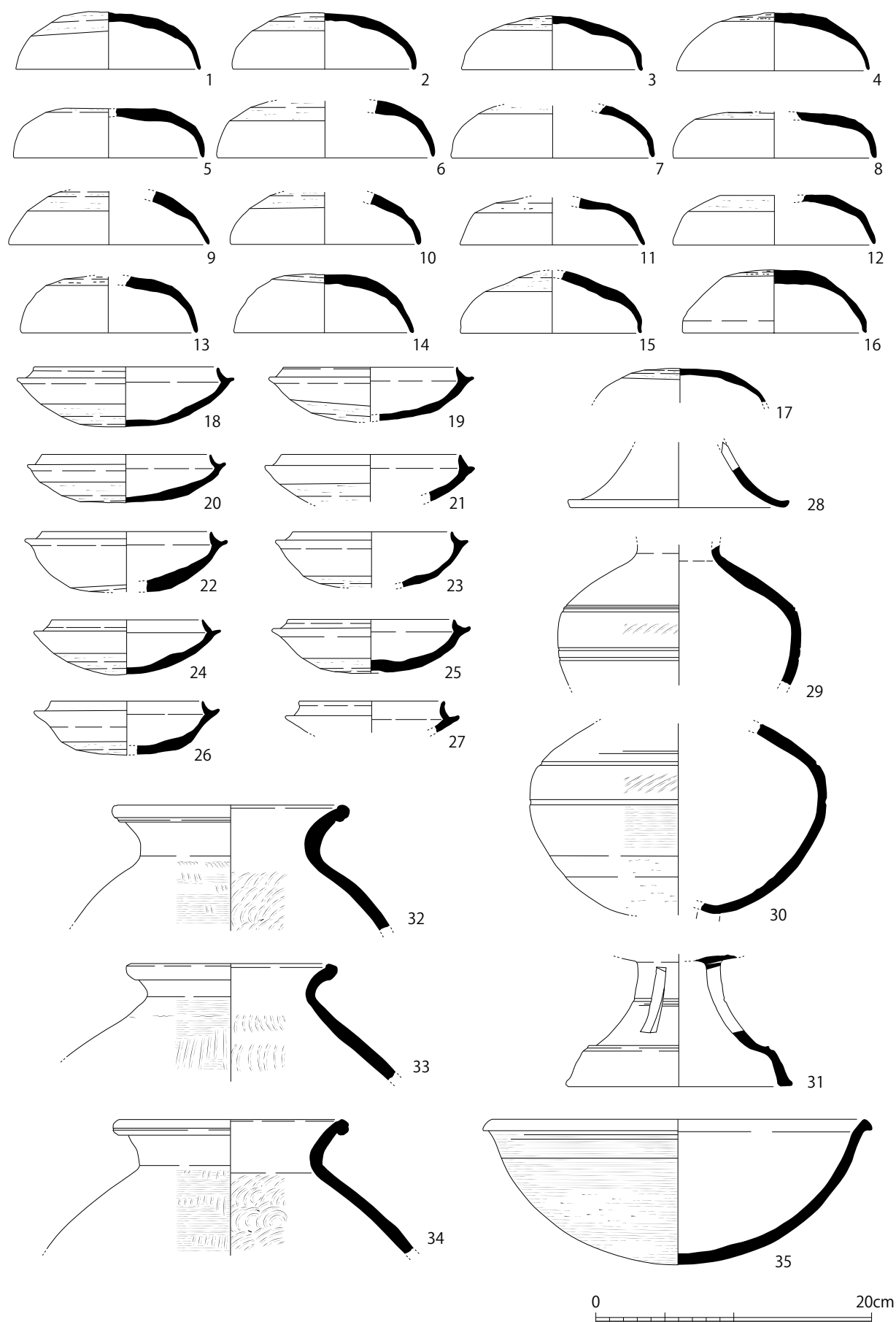


図2 平野1号窯採集須恵器 (S=1/4)

表1 平野1号窯採集須恵器観察表

番号	器種	口底径幅 (復元)	器高 (現高)	調整技法	色調・焼成	備考
1	杯蓋	13.6	4.0	外：天井部右回転ケズリ 内：回転ナデ・天井部ナデ	暗青灰色・硬	
2	杯蓋	(13.4)	4.0	外：天井部右回転ケズリ 内：回転ナデ・天井部ナデ	青灰色・硬	
3	杯蓋	(13.2)	3.9	外：天井部右回転ケズリ 内：回転ナデ・天井部ナデ	青灰一部褐色・硬	
4	杯蓋	14.0	4.1	外：天井部右回転ケズリ 内：回転ナデ・天井部ナデ	青灰色・硬	青陵報告 2
5	杯蓋	(13.8)	3.5	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ	青灰色・硬	
6	杯蓋	(15.8)	(4.0)	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ	暗青灰色・硬	
7	杯蓋	(14.8)	(3.8)	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ	暗青灰一部褐色・硬	
8	杯蓋	(14.6)	(3.4)	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ・天井部ナデ	暗青灰色・硬	
9	杯蓋	(14.6)	(3.8)	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ	青灰色・硬	
10	杯蓋	(14.0)	(3.6)	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ	明青灰色・やや軟	青陵報告 5
11	杯蓋	(13.4)	(3.4)	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ	青灰色・硬	青陵報告 3
12	杯蓋	(14.8)	(3.6)	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ	青灰色・硬	
13	杯蓋	(13.0)	(4.0)	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ	暗青灰色・硬	青陵報告 4
14	杯蓋	13.2	4.2	外：天井部右回転ケズリ 内：回転ナデ・天井部ナデ	青灰色・硬	
15	杯蓋	(13.2)	(4.5)	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ・天井部ナデ	褐灰色・硬	
16	杯蓋	13.4	4.5	外：天井部回転ケズリ 内：回転ナデ・天井部ナデ	青灰色・硬	青陵報告 1
17	杯蓋	(12.4)	(2.3)	外：天井部右回転ケズリ 内：回転ナデ・天井部ナデ	淡青灰色・硬	
18	杯身	(14.8)	4.2	外：底部右回転ケズリ 内：回転ナデ・底部ナデ	青灰色・硬	
19	杯身	14.0	(4.0)	外：底部右回転ケズリ 内：回転ナデ	淡青灰色・硬	青陵報告 6
20	杯身	(13.8)	3.5	外：底部右回転ケズリ 内：回転ナデ・底部ナデ	暗青灰色・硬	
21	杯身	(14.6)	(3.4)	外：底部右回転ケズリ 内：回転ナデ	青灰色・硬	
22	杯身	13.6	(4.4)	外：底部回転ケズリ 内：回転ナデ	青灰色・硬	青陵報告 8
23	杯身	(13.0)	(4.0)	外：底部右回転ケズリ 内：回転ナデ	青灰色・硬	
24	杯身	(12.4)	4.0	外：底部右回転ケズリ 内：回転ナデ・底部ナデ	青灰色・硬	かぶせ蓋片付着
25	杯身	13.4	3.8	外：底部右回転ケズリ 内：回転ナデ・底部ナデ	青灰色・硬	
26	杯身	(12.4)	3.8	外：底部右回転ケズリ 内：回転ナデ	暗青灰色・硬	青陵報告 7

番号	器種	口底径幅 (復元)	器高 (現高)	調整技法	色調・焼成	備考
27	杯身	(11.6)	2.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ	青灰色・硬	
28	高杯	(15.6)	(4.3)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	黒青灰色・堅緻	方形透しあり
29	台付壺	(17.6)	(10.5)	外：施文・回転ナデ 内：回転ナデ	黒青灰色・堅緻	
30	台付壺	(21.8)	(13.8)	外：底部回転ケズリ・カキ目 内：回転ナデ	黒青灰色・堅緻	底部歪みあり
31	台付壺	(16.2)	(9.6)	外：凹線・回転ナデ 内：回転ナデ	青灰色・硬	三方透し 青陵報告 9
32	甕	(16.8)	(9.2)	外：口縁部回転ナデ・体部カキ目 内：同心円タタキ	褐灰色・やや軟	
33	甕	(14.4)	(7.4)	外：口縁部回転ナデ・体部カキ目 内：同心円タタキ	明灰色・硬	
34	甕	(16.2)	(9.3)	外：口縁部回転ナデ・体部カキ目 内：同心円タタキ	灰褐色・やや軟	
35	鉢	(27.4)	10.5	外：カキ目 内：回転ナデ	明灰色・やや軟	青陵報告 10

のうち、古いタイプは若草伽藍の瓦と同様の特徴をもつ。軒丸瓦は出土していないが、斑鳩寺の瓦を生産した窯として、候補にあげることができる⁶⁾とされているからである。若草伽藍との関係が認められるならば、この時期における須恵器の実年代推定の資料となろう。

史料にみる造寺活動 ここで須恵器の年代に関わる寺院造営の経過を見てみたい。斑鳩寺については推古十四(606)年に播磨国の水田が施入されることでその名が出る。この年には飛鳥寺においては、丈六の金銅仏と繡仏が完成、金堂に納まるが、丈六光銘によれば推古十七(609)年のこととされ、やや遅れる。斑鳩寺においては、法隆寺金堂の薬師如来像光背銘に造寺・造像が丁卯(607)年とある。これらの史料によれば、飛鳥寺と斑鳩寺は、造寺着工の年次は飛鳥寺が早くとも、金堂に仏像が安置される時期はほぼ同時期ということになり、斑鳩地域の造寺活動はかなり早いといえる。いずれにしる斑鳩寺の造営はほぼ7世紀初頭となる。それに関連して辻ノ垣内3号窯が出現したとなれば、その須恵器の年代も伽藍造営期間の中で瓦葺きが始まる頃の一時期を示すものといえる。

若草伽藍の出土須恵器 若草伽藍では、これまでその内外において調査が行われ、少ないながらも創建時にかかわる須恵器が出土している。若草伽藍西方の流路である法隆寺SD2140では、その東岸より多量の木屑が杯身(図6-4)と共に出土している。この木屑は伽藍造営にともなうものとされるが、瓦の伴出は記されていない。下層からは

杯身(図6-5)が出土している。また、若草伽藍の調査では整地土中・中世の瓦溜・包含層より出土したTK-43型式とされている杯Hが計3点報告されている⁷⁾。法隆寺SD2140出土土器と共に、初期の若草伽藍に関わる須恵器と思われる。

平野窯の実年代 平野窯の須恵器は、杯身の形態をみるとTK-209型式とTK-217型式の双方の形態をもつものに対し、辻ノ垣内窯の須恵器杯身はほぼTK-217型式のものに限られ、つまみをもつ蓋(杯G)が出現しているので、辻ノ垣内3号窯は平野窯よりやや新しいといえる。

辻ノ垣内3号窯の時期を7世紀初めの若草伽藍造営期間のうち、瓦葺き工程が始まる頃の一時期にあたるとすれば、平野窯の成立は若草伽藍造営開始直前ころの6世紀末葉を中心とした時期と推定しておきたい。

葛下川下流域の地域特性 平野窯周辺のような須恵器・瓦窯と、飛鳥期の特に有力な平野塚穴山古墳、そして複数の飛鳥時代寺院が集中して存在するところは、大和においても飛鳥地域を除くとごくわずかである。

寺院についてみると、平野窯近傍の尼寺北麁寺と未だ内容は不明であるが、尼寺廃寺南遺跡の存在があり、ここに僧寺と尼寺の二つの寺院が建立されていたことは確かであろう。飛鳥時代において、このような僧寺と尼寺を合わせて建立できる地域とその造立者となれば、大和でも飛鳥以外ではかなり限定されてくる。片岡の地域は飛鳥時代においては、斑鳩と並ぶ重要地域とみることができる。馬見丘

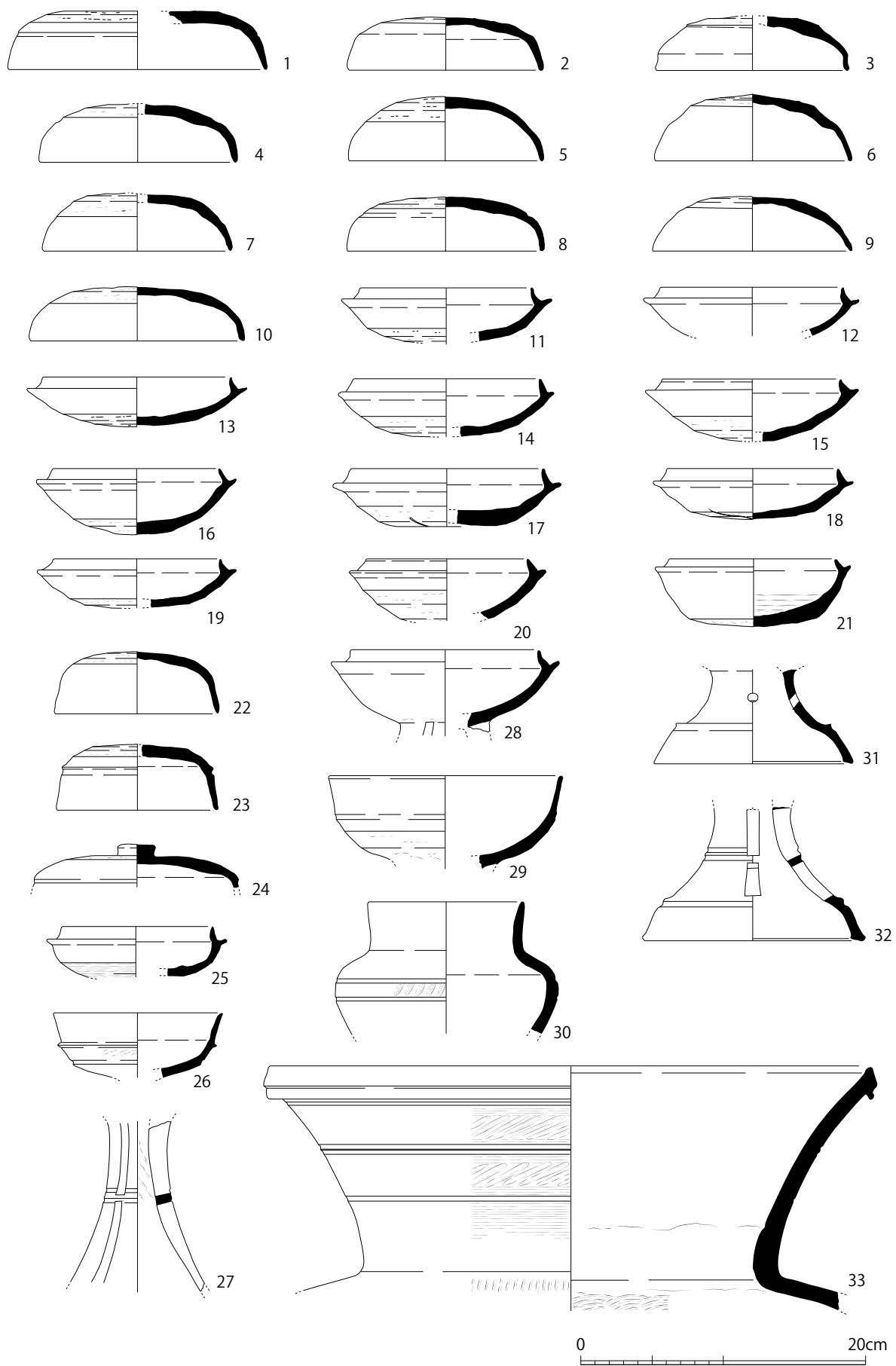


图3 平野2・3号窯採集須恵器 (S=1/4)

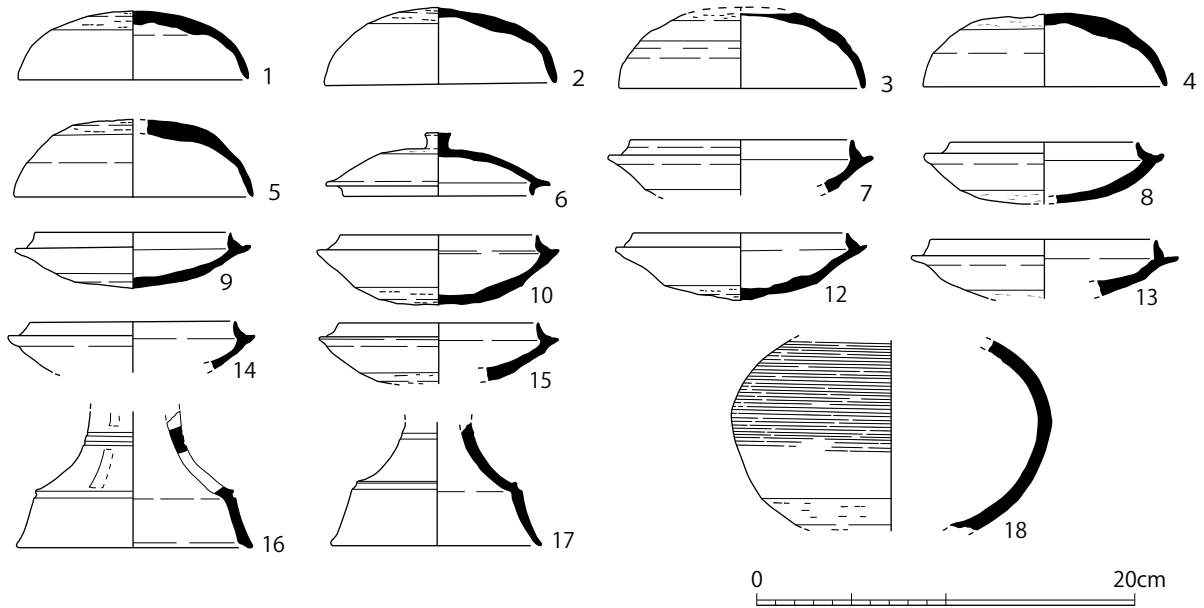


図4 三郷町・辻ノ垣内3号窯（旧ツクシ山）採集須恵器
(S=1/4、11は10と同一品のため除く)

陵を含むこの大和西部地域は、敏達天皇皇子の忍坂彦人大兄皇子の古墳として確実視される牧野古墳の存在が示すように、古代史においてもいわゆる敏達王家に関わる地域とされる。

平野窯と辻ノ垣内3号窯 奈良盆地内部において、今のところ須恵器生産が最も早く行われているところは平野窯と共に辻ノ垣内3号窯に限られている。しかもその成立は近い時期にあり、この二地域は寺院・瓦窯が隣接して存在するという共通点がある（図5）。距離的にも大和川を挟みながらも、さほど遠くない位置にあるといえよう。採集須恵器の比較では平野窯がやや古いが、共にかなり時期が近い。辻ノ垣内窯で須恵器生産が行われるにあたり平野窯の存在も関係していることが考えられる。

辻ノ垣内窯では若草伽藍の造営ともかかわるような瓦が出土していることは、その成立は上宮王家による生産活動によるものであることは確かと思われる。このような辻ノ垣内窯の成立については、地理的に近く、時期的に先行する平野窯の存在が契機となるような関係にあったことも考えられよう。

敏達王家と上宮王家 これまで平野窯周辺は尼寺廃寺や飛鳥時代の平野古墳群の所在より、いわゆる敏達王家の所在地域とされていた。一方、辻

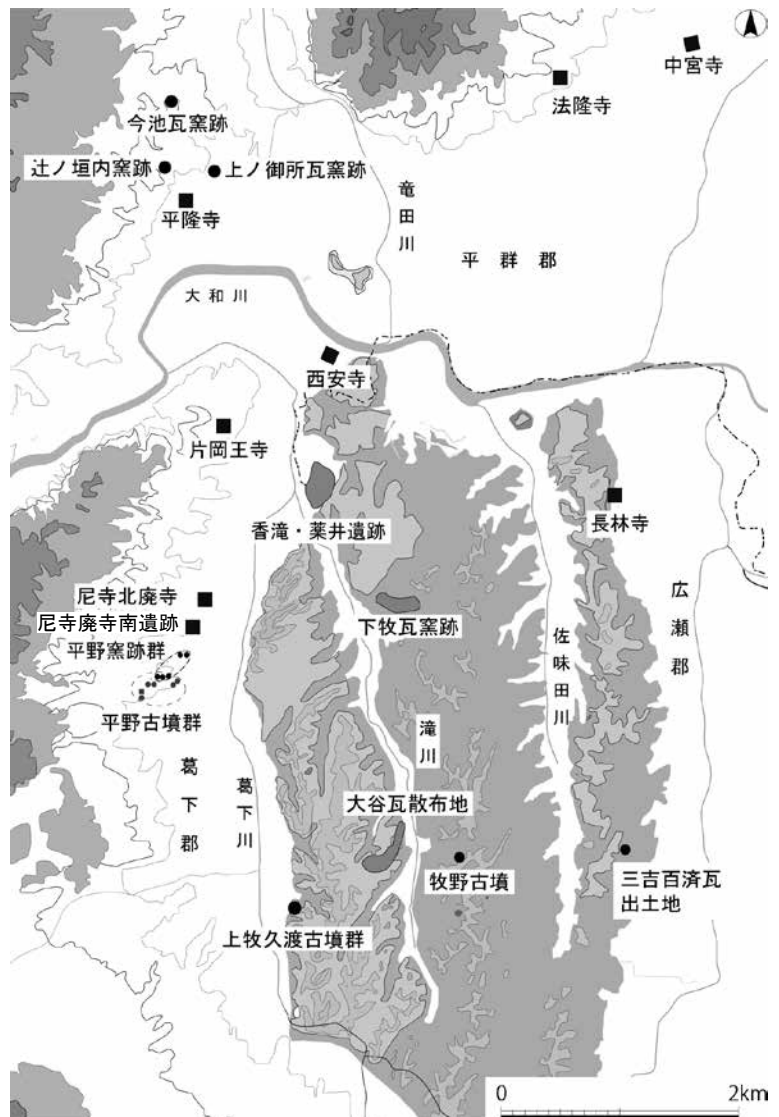


図5 大和西部の須恵器窯と遺跡

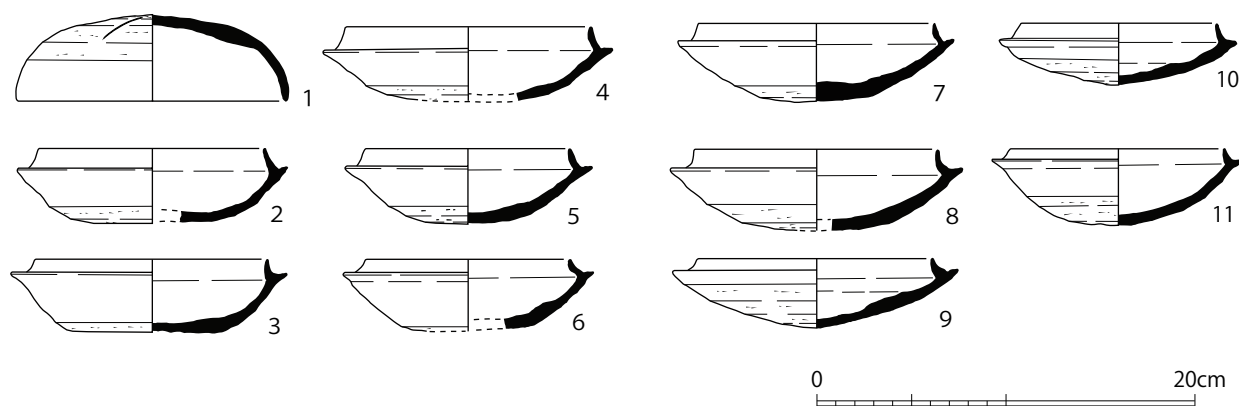


図6 杯Hの諸例 (S=1/4)

1・2：飛鳥寺下層、3：豊浦寺下層、4～6：法隆寺 SD2140、
7～9：TK209 号窯、10・11：TK217 号窯

ノ垣内窯の成立にもおそらく上宮王家との関りが考えられる。大和川をはさんでこの片岡地域と斑鳩地域は、ともに飛鳥時代王家の存在という対照的な関係にある。奈良盆地における飛鳥時代初頭前後の須恵器窯の出現がこの二地域に限られることも、このような王家の存在にかかわるものといえよう。

王家は経済的にも自立性が高く、消費財の生産を自らまかなうことが多いことは、奈良時代の長屋王家を支える経済体制をみても理解できる。須恵器生産を自領で行っていることも、このような王家による生産体制の一環なのであろう。距離的に近く時期もほぼ変わらない平野窯と辻ノ垣内窯の須恵器生産は、むしろ相互の関連を示すものである。須恵器を通じて王家の間の生産組織のつながりも考えられるのではないと思われる。

註

- 1) 篁園勝男 1974「香芝町平野古窯跡採集の須恵器について」『青陵』NO.25 奈良県立橿原考古学研究所
- 2) 奈良県立橿原考古学研究所 1983「平野窯跡群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1982 年度 (第二分冊)』
- 3) 関川尚功 2015「上牧久渡 4・5 号墳と古墳時代後期の様相」『上牧久渡古墳群』上牧町教育委員会
- 4) 香芝市二上山博物館 2019『聖徳太子と古代王家』
- 5) 奈良県立橿原考古学研究所 1984『平隆寺』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 47 冊
- 6) 清水昭博 1999「瓦の生産」『蓮華百相－瓦からみた初期寺院の成立と展開－』橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第 51 冊

- 7) 奈良文化財研究所 2007『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第 76 冊

参考文献

- 植野浩三 2000「大和における須恵器生産の特質」『文化財学報』第 18 号
- 香芝市教育委員会 2005『平野 2 号墳』
- 塚口義信 1990「茅渟王伝考」『堺女子短期大学紀要』25 号
- 奈良県立橿原考古学研究所 1996「勢野・辻ノ垣内古窯跡の調査」(現地説明会資料)
- 平林章仁 1987「敏達天皇系王統の広瀬郡進出について」『日本書紀研究』第 14 冊

挿図出典

- 図 1：奈良県立橿原考古学研究所 1981『大和国条里復原図 大和国条里の総合的研究 地図篇』(財)由良大和古代文化研究基金より No. 51・52・58・59 地図を一部改変
- 図 3：註 4) 文献
- 図 4：註 5) 文献より一部改変
- 図 6
- 1・2：奈良国立文化財研究所 1958『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第五冊より一部改変
- 3：奈良国立文化財研究所 1986「豊浦寺第 3 次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』16 より一部改変
- 4～6：奈良国立文化財研究所・奈良県教育委員会 1985『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』法隆寺より一部改変
- 7～11：田辺昭三 1966『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブより一部改変